2021.12.26 七里教会　　最上光宏

「主よ、今こそ」　　ルカによる福音書 2:22-32

クリスマスの礼拝とイヴの賛美礼拝が豊かな恵みのうちに終わり、今日は今年最後の礼拝を迎えました。暦の上では、これからあわただしい「年末・年始」を迎えることになります。しかし、聖書の立場からすると、クリスマスを迎え祝ったその時から、新しい年が始まったということになります。私たちの救いのために神さまから遣わされた御子イエス・キリストと共に、私たちの新たな歩みが始まったのです。

マリアから生まれたイエスさまは、律法という神の掟に従って、8 日目に割礼という儀式を受け、み使いから告げられた通りに「イエス」と名づけられました。

この「イエス」という名前は「神は救い」という意味です。私たちは普段「イエス・キリスト」と言いますが、この「イエス」が本来の名前で、「キリスト」は名前ではなく、「救い主」メシアという意味のギリシャ語「クリストス」から来ています。つまり私たちは「イエス・キリスト」と言うことによって、「イエスは救い主である」ということを言い表していることになるわけです。

さて、モーセの律法によると、生まれた赤ちゃんが男の子の場合、割礼を受けた後、33 日間、産婦の「清めの期間」として家で過ごすことになっていました。そしてその子が初めて子の場合、その子を神さまに献げる意味で、羊やヤギ、貧しい人の場合は、山鳩一つがいか家鳩のひな二羽を献げることになっていました。マリアとヨセフは、貧しかったため、生贄にする鳩を携えて、みどり子イエス連れて、神殿に詣でたのです。

今日の聖書の箇所は、その神殿で、シメオンという老人と出会った時のことです。このシメオンという人は、25 節によると「正しい人で、信仰があつく、イスラエルの慰められるのを待ち望み、聖霊が彼にとどまっていた」と記されています。当時ユダヤの国は、ローマ帝国の支配下にあって、高い税金を課せられ、自由を奪われ、人々は貧困にあえぎ、将来に不安を抱えていました。そういう中で、このシメオンは、神さまは決してこの民をお見捨てにならない。旧約の預言者たちが予言していたように、神さまは必ず救い主(メシア)をお遣わしになり、この民を解放し救ってくださると信じ、毎日、神殿に通って祈りを捧げていたのです。

エルサレムの神殿は、いつも各地からの参拝客で賑わいごった返しています。そういう中で、待ち合わせでもしていなければ、めったに特定の人と出会うなどということは、起こりません。今のように、みんながマスクをしていると、親しい人とすれ違っても、分からずに見過ごしてしまいます。ましてや、全く面識のない者同士が、出会う

などということは考えられないことです。

しかし、この老シメオンは、マリアの胸に抱かれた、生れてまだ40日ほどしかたたない赤ん坊イエスさまを見た瞬間、いきなりその子を自分の腕に抱きかかえ、神さまをほめ讃えたのです。マリアとヨセフの驚きはどれほど大きかったことでしょう。

出会いというものは、ほんとうに不思議なものです。私の人生にも多くの人との出会いありました。その一つ一つの出会いを通して、今の私があることを思うと、ほんとうに不思議な感じがいたします。多くの友人との出会い、妻との出会い、恩師との出会い、それぞれの教会での多くの主にある兄弟姉妹との出会い。そういう出会いの中で、今の私があるのです。その出会いは、自分が計画したものでも、造り出したものではなく、すべて神さまが備えてくださったものだと思っています。そのようなすべての出会いの中で、最も大きな決定的な出会いは、言うまでもなく、イエス・キリストとの出会いです。その出会いによって、私の人生は大きく変えられました。

シメオンの場合は、晩年近くになって、じかに、直接、みどり子のイエスさまに出会い、自分の胸に抱くことが出来たのです。老シメオンの感動と喜びは、想像を絶するものでした。シメオンは、その主イエスを胸に抱いて、高らかに神を賛美したのです。それが29節から32節までに記されている「シメオンの賛歌」と呼ばれる詩(うた)です。

「主よ、今こそあなたは、お言葉どおり、この僕を安らかに去らせてくださいます。
わたしはこの目であなたの救いを見たからです。…」(29-30節)。

この歌は「主よ、今こそ」という冒頭の言葉のラテン語訳から「ヌンク・ディミティス」と呼ばれて歌い継がれて来た讃美歌です(讃美歌21-180,181)です。

「主よ、今こそあなたはこの僕を安らかに去らせてくださいます」。これは、「もう、今すぐ死んでもよい」という意味です。シメオンの喜びと感動はよく分かりますが、いくら何でも、「今すぐ死んでもいい」という言い方は、少しオーバーな言い方ではないか、という気がします。このような言い方には、それなりの理由があったのです。シメオンは、生きている間に、なんとか救い主にお目にかかり、神の救いのしるしを見たいと願い、祈り続けてきたのです。そして祈りの中で、26節に記されているように、「主が遣わすメシアに会うまでは、決して死なない」との、聖霊による示しを受けていたのです。シメオンは、かなりの高齢で、体も弱り、いつ召されるか分からないという、自分の死を間近かに見つめて生きてきたのではないかと思います。そういう中で、何とか、生きているうちに救い主キリストにお目にかかりたいと待ちつづけ祈り続けてきたのです。神さまはその祈りに応えて、「救い主(メシア)に会うまでは決して死ぬことはない」と約束しておられたのです。そしてついに、その祈りが聴かれて、救い主にお目にかかり、自分の胸に抱くことが出来たのです。

彼は決して、死を望んでこのように詠ったのではありません。死に急ぐ理由はなにもありません。ただあまりの喜びに、「これで死んでも本望だ」という思いに満たされているのです。

私も、高齢ですので、自分の最期をどう迎えるのかと時折、考えることがあります。そのような時に、このシメオンのように、思い残すことなく、心満たされた思いで、安らかに感謝のうちに最後を締めくくれたら、どんなに幸いだろうか、と思います。

「主よ、今こそあなたは、お言葉どおり、この僕を安らかに去らせてくださいます」。このシメオンの言葉は、主を待ち望み続けた者の喜びの賛歌です。詩編の中には「主を待ち望む者が、いかに幸いであるか」とうたった詩が多くありますが、シメオンの賛歌もまた、主を待ち望む者の喜びと幸いをうたった歌なのです。主を待ち望む者のみが、「主の救いを見る」ことができるからです。

シメオンは、３０節で「わたしはこの目であなたの救いを見たからです」と、その喜びの理由を述べています。しかし彼の喜びは、単に自分個人の救いの喜びに留まるものではありませんでした。彼の眼は、自分自身の救いから、イスラエルの民全体の救い、異邦人を含めた、すべての民の救いへと向けられているのです。

この歌の後半、31 節以下には、こう詠われています。「これは万民のために整えてくださった救いで、異邦人を照らす啓示の光、あなたの民イスラエルの誉です」。

この個人から、すべての民へという展開は、「マリアの賛歌」にも見られたことです。身ごもったマリアは、エリサベトの祝福を受けた時、やはり高らかに主を賛美して、「身分の低いはしため」である自分を憐れみ、力ある業をなさってくださった主をあがめ、そのような大きな御業をなさった主は、身分の低い者や、飢えた貧しいすべての人々にも、その力をふるってくださる、と高らかに賛美しました。

老シメオンも、自分の御子との出会いの喜びを通して、すべての民の救いを確信し、「異邦人を照らす啓示の光」「み民イスラエルの誉です」と詠うのです。イエス・キリストによる救いは、「私」個人の魂の救いに限定されるものではありません。自分だけ救われればよいというようなものではないのです。イエス・キリストの降誕は、「すべての民に与えられる大きな喜び」(ルカ 2:10)の出来事でした。神さまは、この世の「一人も滅びないために」その独り子をお与えになったのです。

そのために神の御子、イエス・キリストは貧しい飼い葉おけに生まれ、この世の多くの苦しみを担い、十字架への道を歩まれたのです。シメオンは、そのことを察して、母マリアに語られたのです。「御覧なさい。この子は、イスラエルの多くの人を倒したり立ち上がらせたりするためにと定められ、また反対を受けるしるしとして定められています。—あなた自身も剣(つるぎ)で心を刺し貫かれます」(34-35 節)。なんという不

吉な言葉でしょうか。全世界のすべての人に与えられる大きな喜びの背後には、このような深い苦しみの犠牲が伴うのです。

老シメオンは、聖霊によってそのことを示されつつ、「主よ、今こそあなたは、お言葉どおり、この僕を安らかに去らせてくださいます」と詠ったのです。この言葉は、前にも申しましたように、「早く死にたい」という老人の繰り言ではありません。

私の母は、12 年前に 98 歳で天に召されましたが、90 を過ぎて体力や気力が落ちてきた頃から、口癖のように「早くお迎えが来ないかしら」としきりに言うようになりました。洗礼を受けて教会にも連なっていましたが、今までのように何もできず、何の役にも立たないことを嘆いて、早く神さまのもとに行きたいと嘆くようになったのです。色々慰め励ますのですが、「お前もこの歳になったらわかるよ」と言われ、弱っておりました。そんなある時、以前郷里の八戸の教会でお世話になった西堂昇牧師の夫人に会いたいというものですから、隠退して住んでおられた茨城の自宅に車で連れて行ったことがあります。牧師夫妻とも母より少し年配でしたが、久しぶりの再会を喜び、話し合っておりましたが、母がいつもの癖で、「早くお迎えに来ないかしら」と言った時、牧師夫人は急に大きな声でこう言ったのです。「信子さん、何言うの! こんな悪い時代なのに、あなた自分のことしか考えられないの。まだしなければならないことがあるでしょう。お祈りしなければならないことがあるでしょう!」と言われました。母はその剣幕にきょとんとしていましたが、私もハッとさせられました。その夫人は、94,5 歳ぐらいになっていましたが、子どもたちの未来のために少しでも平和な世の中を残したいと祈り、平和憲法を守るための署名を集めるなどしておられたのです。

私たちは、今の自分たちの平安だけを求めていていいのだろうか。たとえ年老いて何もできなくても、子どもたちのため、この国の平和のため、世界の全ての人々のために祈ることは出来るし、祈り求める責任があるということを改めて思わされました。

「主よ、今こそあなたは、お言葉どおり、この僕を安らかに去らせてくださいます」。老シメオンのこの賛歌は、世界のすべての人々を救うためにこの世に来られた救い主との出会いの喜びの中で、「いつ召されてもよい」という感謝の思いに満たされつつ、これからの主の働きに期待し、委ね、自らも生きながらえる限り、主に従って共に歩んでいきたいと願う祈りの言葉でもあるのではないでしょうか。

クリスマスを共に祝った私たちも、飼い葉おけに宿られた主をしっかりと心の深みに抱きつつ、生かされている恵みを感謝しつつ、主が召されるその時まで、それぞれに与えられている使命を果たしていくものでありたいと願います。　　アーメン